生涯ただ一筋に―曹洞宗学界の乾坤第一峯

――鏡島元隆先生をお偲びして――

駒沢女子大学学長　東　隆眞

台湾で、釈迦牟尼仏正伝袈裟普及協会の主催による中華民国仏教青年会を通じてのお袈裟百肩寄進の行事に名誉顧問として臨んでいるところに、恩師鏡島元隆先生（駒澤大学第二四代総長）ご遷化の訃報が飛びこんだ。

平成十三年二月十九日、老衰のため、ご自坊の静岡県蒲原町、泉龍寺東堂（第二〇世）としてご遷化になった。満八十八歳であった。

私は、帰国して、翌朝早く泉龍寺に走り、密葬のまえ、先生に対面した。「なんの苦もなく、静かに息をひきとりました」と、和子夫人はおっしゃった。

遺偈は、「潜行密用、道履未全、転歩劫外、生生磨研」。

「道履未だ全し」といい、「生生に磨研せん」といい、先生の仏道への願い、学問に対する謙虚さを拝する。

また、辞世の句が掲げてあった。

「如来より　賜り給ひしこのいのち　返しまつらん　いまぞ　このとき」

わがいのちは、わがいのちにしてわがいのちにあらず。み仏のおいのちである。いま、生死を超えたみ仏のみもとにおかえしすると、私は拝する。先生の死生観というか、信仰観というか、決定したお覚悟のほどを思う。

衛藤先生の志継ぎ新地平開く

鏡島先生は、道元禅師と曹洞宗学の研究、指導に一筋に打ち込んでこられた。全生涯を、ただ、ただ、この一事にそそいでこられた曹洞宗学界の乾坤第一峯であった。

それは、衛藤即応先生の志をうけつぐものであり、さらに新しい地平を開くところがあった。

衛藤先生の志をうけつぐというのは、いろいろあるが、道元禅師の説かれる仏法を万人に開かれたものとして学び、研究、指導をすすめていくということであり、さらに新しい地平を開くというのは、衛藤先生が、道元禅師の仏法を悟りの仏法というよりは信の仏法としてうけとめられたところを、先生は、なお誓願の仏法であることを強調し、また、凡夫の宗教であり、共生の禅であり、報謝の禅であると説かれたことであろう。最晩年の著書『道元禅師』(春秋社刊)に、くわしい。私は、先生に請われて、本書の書評を『中外日報』(平成九年十一月八日付)に寄せた。本書は、先生が一代を賭けて到達された学問と信仰の一致点の告白の書であったともいえよう。

昨今の宗学界には憂いと怒りと批判

さて、また、先生は、昨今の曹洞宗学界の状況に深い憂いと、激しい怒りと、厳しい批判を抱いておられた。すぐれた先学たちの仏法を学ぶことを忘れ、勝手放題のことを言いちらかし、良識をそなえた大方の仏教学者の顰蹙を買い、仏教を学ぶ学生たちをいたずらにとまどわせて

いる若い教授先生たち。あたりの様子をうかがい、時流に迎合し、無責任な評論家となり、陰口を利きあい、曲学阿世の輩となりはてた老いぼれ学者たち。先生は、困惑し、眉をひそめ、激しく私に語られた。

先生は駒澤大学総長のころ、突如、なんの前触れもなく、私庵にお立ち寄りになった。こういうことは、先生としては、異例中の異例の行動であろうとおもう。が、あいにく私は不在であった。妻はあわてふためいてうろうろするほかなかったようであるが、「東先生は、こういうところにお住まいですか」と、ぽつんとおっしゃったまま、お茶をおのみになり、十分ばかりして、お帰りになった。ほとんど会話はなかったらしい。

しかし、妻は、寡黙な先生のお姿にはじめて接して、ますます尊敬の念を深めたのであった。どんなに大勢いようと、夫のお相手はどういうお方であるか、陰にいてちゃんと見抜いているのが妻というものである。妻は、永い間、私から先生のお人柄を聞かされていたせいもあるかも知れないが、お会いしてからというものは、一層、ファンになったのである。

先生をおしのびするにあたって、どんなことばがふさわしいだろうか。誠実、寡黙、簡潔、非妥協、明晰、親切といった単語が思いつくままに浮かぶ。

先生は平成七年、五十余年にわたる駒澤大学勤務を退職されるにあたり、その退職金その他を合わせた六千万円余を全額、宗門、学界に寄附された。後進の育成を願ってのことである。このような例を、私は寡聞にして他に知らない。

宗門に生き、宗学を学ぶ私たちは、先生の切なる願いはどこにあるかということを、深く深く心の底に問いかえしてみなければならない。

（「中外日報」平成十三年三月一日付）

さらに書き添えておきたい。

それは、故鏡島元隆先生と、善光寺住職黒田武志老師との永い深いつながりである。

黒田老師は、駒澤大学仏教学部仏教科を昭和三十五年三月に卒業し、ひきつづいて同大学院人文科学研究科修士課程を私と一緒に終了したのであるが、老師は、昭和二十六年に創立した駒澤大学茶道部、一服会に在籍し、二十五年にわたって会長をつとめていた。後任の新美昌道会長は、平成十二年五月四日、駒澤大学茶道部創立五十周年記念誌としてB5版百頁の『喫茶去』を出版した。本書の二十頁から四十七頁にわたって、黒田老師は「生き続ける利休の精神」と題して、茶道の真髄と駒大茶道部の歴史の一端を情熱をもって記している。詳しいことは右にゆずるが、鏡島先生は、昭和六一年四月、駒澤大学総長に就任されるまで、二十五年あまりの永きにわたって茶道部の部長として部の発展に尽力されるところがあった。鏡島先生は、「よく茶禅一致と言われ、茶道と禅道とは一つであると言われる。この言葉はよく言われ言葉であるが、そのことが本当に分かるのは容易なことではない。（略）禅とは、心を学び、心を錬ることによって『道』に達するものである。従って、茶道もそれが茶「道」であるためには、心を学び、心を錬ることがなければならない（略）。曹洞宗では坐禅の修行を主として心を学び、心を錬る（略）。

茶の作法を学ぶことを通して心を学び、心を錬ることができるか、それとは別に参禅を介しなければ心を学び、心を錬ることができないか、ということはむずかしい問題であり、古来の茶道家の苦心の存するところであろうが、禅の大学である本学に学ぶ諸君は後の道を進まれんことを望むのである」とお示しになっている。

もちろん鏡島先生と黒田老師とは、師弟の関

係であり、まさに親子ほども年齢はへだたっているのである。しかしながら、駒澤大学茶道部一服会は鏡島元隆部長と黒田武志会長との名コンビよろしく人事配置の妙を得て、その発展、興隆に資するところがあったのである。

さらにまた、鏡島元隆先生と黒田老師とのご縁は続く。

周知のとおり、黒田老師は、昭和五十九年に、「横浜善光寺留学僧育英会」(当初は善光寺海外留学僧派遣育英会とよんだ)を設立した。黒田老師は、この育英会の設立は茶道精神と根底を同じくするものであると言っている。本年で満十七年をむかえるが、この間に二十国、一地域、百二名の育英生を数えるに至った。わが国の仏教寺院で単独の育英事業を維続して実行し、後進を育成しているのは、きわめてめずらしく、私は、黒田老師の捨身の菩薩行に共鳴し、同感し、尊敬の念をもっており、創立当初より、理事の立場を汚している。この育英会の趣旨に賛同していただいた鏡島元隆先生は、昭和五十九年の創立当初から育英会顧問として御指導、御協力を仰いできたのである。

善光寺の檀信徒各位をはじめ、日本国内の各宗の諸大徳はもとより、海外の高僧、学識経験者、実力者の総力を結集して、育英会は成り立っているのであるが、黒田老師の深い理解者であり、指導者であった鏡島元隆先生の御恩にあらためて深く謝意を表さなければならないという思いが、私の胸中にある。